※ＩＤＥ大学協会の許可を得て掲載しております。無断で複製・転載することを禁じます。

●巻頭言●

# MOOCはなぜ「衝撃」なのか

濱　田　純　一

MOOCという聞き慣れない言葉が，最近は一般の新聞などにも取り上げられるようになった。Massive Open Online Course，つまり大規模公開オンライン講座というものである。このサービスを提供する数多くのプラットフォームが誕生している中で，数10万人から100万人単位の規模の登録会員数をすでに獲得しているものもあり，高等教育のあり方に与える「衝撃」について，このところ，世界の有力大学の学長会合でもしばしば話題になる。

もっとも，MOOCの将来についての見方は分かれている。大学のシステムに大きな影響があるという意見もあれば，いやさほどでもないという意見もある。ただ，少なくとも，これまでのようなe-ラーニングや，授業資料の公開を中心としたOCW（オープン・コースウェア）などとはどうも違う，という認識は一致している。その方向性もプラットフォームによって特徴があり，国際的な規模の拡大に力を入れているものもあれば，キャンパスでの教育に，オンライン講座がどう活用できるかの実験的位置づけとしているものもある。

見込まれる「衝撃」のポイントは，いくつかある。一つは，教育環境の格差是正という意味合いである。世界の中で，高等教育機関が十分に整備されていない国や地域に住む人々であっても，MOOCを利用することで，さほどの負担なく高いレベルの授業にアクセスできる可能性が生まれる。また，いま一つには，有名教授や有力大学による質の高い授業が全世界的に流通していくことで，大学の国際的な布置の構造に，ひょっとして変化をもたらすかもしれないという見方もある。

MOOCの活用で，世界に散在するトップ学力層へのリーチが容易になり，優秀な学生のリクルートにも役立つだろう。いわばWinner-take-allの構造が，国境にかかわらず大学間で，さらには大学内部でも生まれてくることも考えられる。さらには，事前にオンラインで予習したことをベースに，教室での授業では議論などでその内容を深化させていく，「反転授業（Flipped Classroom）」といった工夫が取り入れられることで，これまでの学習や授業のあり方が大きく変わるという期待もある。

東京大学の場合は，このMOOCのプラットフォームのうち，CourseraとedXの二つに参加してコースの提供を始めているが，前者で昨年秋にスタートした二つのコースでは，世界中からあわせて累計8万人を越える登録者があり，5,400人の受講者に修了証を発行したという結果が出ている。まずは実験的にと動かし始めたものだが，その反応の大きさに正直驚かされた。

MOOCはなお発展を続けているシステムである。ITを活用した教育方法のさらに大きな可能性が，ここから開発されてくるかもしれない。すでに，このMOOCのスキームの中には，掲示板を活用した質問やディスカッション，何万人規模の履修へも対応可能な科目ごとの履修認定のシステム，オンラインでの習熟度評価，学生レポートの相互採点，などといったいろいろな工夫が盛り込まれており，これを運営していくための新しいビジネスモデルも作られつつある。

コースを提供する大学の立場からは，授業プログラムの制作や運営のコストをどう賄うか，授業の質の保証や学生の個人情報の保護といった課題のほか，反転授業などの教育効果についても見極めていかなければならない。

こうした国境を越える世界的な動きにくわえて，各国の教育の仕組みや目標，言語の特性などを踏まえた，地域MOOCも立ち上がりつつある。日本でもJMOOC（日本オープンオンライン教育推進協議会）がスタートして，産学が協働しての本格的な継続学習社会の実現を視野に入れ，サービス提供を行うことになっている。そうした動きも含めて，今後このシステムは多様な発展を遂げていくと思われるが，いずれにしても，大学における教育のあり方をもう一度見直してみるきっかけになるだろう。アメリカの有力大学でも，MOOCをきっかけに，研究に向きがちだった教員の関心が，教育の方向にも向き始めたという報告もある。

MOOCはあくまで道具である。その有する可能性を真剣に考える中で，これまでの教育のあり方全般にも目が向けられ，キャンパスでの日々の教育の質が向上していけば何よりである。まずはその意味での「衝撃」に，正面から向き合うべきだろうと思う。

（東京大学 総長／情報法，情報政策）